

実況中継！

村立ち往生

大鹿村リニア連絡協議会

大鹿村ではＪＲ東海と交わした確認書に基づき、ＪＲ東海も交えて「リニア連絡協議会」が開かれることになりました。村は住民の不安や環境対策はそこで協議するから大丈夫だと説明しています。本当でしょうか？

■「村の責任放棄だ」

１２月１９日、大鹿村の交流センターで、第一回大鹿村リニア連絡協議会がありました。２７の自治会会長と職掌代表やＪＲ東海、県まで来ているので、大人数でした。

この日は冒頭、柳島村長が、環境への低減が会の目的と述べた後（写真、挨拶する柳島村長）、事務局が会則案を読みあげました。そこで自治会長の一人のＡさんが手を挙げて質問しました。

Ａさんは、当初の資料の中では掲載されていた設置の目的の中で「住民意見などを共有し」という文言が、会則案の中ではなくなっている点について触れました。そして住民の意見をくみ取る活動を村がしてこなかったことについて会の設定そのものを考え直す必要があると、村当局の姿勢を問いました。Ａさんは新聞記事などを引用して、これまでの村の対応を具体的に批判しました。反対の意見は無視してきて、意見を汲みあげる役割を自治会長に求めるというのは、村の責任放棄だということです。

■「不本意なんてやめてくれ」

副村長の長尾さんや、柳島村長が発言しましたが、Ａさんが「聞いたことに答えていない」と言い返す場面が見られました。村がどう考えているのかは何回も言ってきた、リニアを進めてほしいわけではなく国の認可を拒否できないから対策をとってきた、反対の意見も拾ってきたつもりだから苦情を上げてほしい、と質問の意図をくみ取らない柳島村長の答えに、（着工を強引に進めてきて）「不本意なんてそんな発言やめてくれ」とＡさんはいらだちを表明していました。

対策委員会にも出席してきた別の委員の一人が、「そもそも論」は自治会長会や別のところでしてほしい、と述べて会議を進めるよう発言しました。でも、「そもそも論」を避けてきたため、リニアへの反対や不信は、公の場で議論されなかったのです。副村長の要領を得ない答弁や、村長が黙り込む場面が目立ち、白けた雰囲気の中、柳島村長は「進めさせてほしい」となかば懇願していました。今後は３カ月に１回程度の開催が予定される連絡協議会。村への信頼が低下した中、私たちの心配や不安は本当に反映できるのでしょうか。

■「リニア詣で」はできないか？

その後、ＪＲの報告と県の説明が続きました。澤田部長もフロアの緊迫した雰囲気、「反対の方がいることはわかっている」といつもの居丈高な態度がありません。最後に別の委員が手を挙げて、「リニアの試乗会に行ってみたいので、優待券はないのか」と発言して、委員の中から笑いが起きていました。

電力会社が議員に金をばらまいて、原発立地予定地や核廃棄物処分場計画のある自治体の住民をあごあしつきで原発や六ヶ所に関連させていき、「安全神話」を印象付ける原発詣でが過疎地の自治体では繰り返されてきました。もちろん、山梨のリニア見学センターも同様の目的の施設です。とはいえ、自費でやると豪語したにも関わらず、国に財政投融資という無心をするＪＲ東海、澤田部長は「抽選です」とポツリと答えていました。



柏崎刈羽原発とリニア実験線
を結ぶ 100 万 V の送電鉄塔



●●●●●
☑大鹿リニアを止める実行委員会

通信第 6 信 2017.1.12

TEL 0265-39-2067 (宗像) メール munakatami@gmail.com

●●●●●

リニア対策委員会は何をしてきたか？

柳島村長は、リニアに対する対策は2年近く継続してきた大鹿村リニア対策委員会での調査も踏まえ、きちんと環境対策を話し合ってきたと言っています。ところが、着工同意は住民に公開の場でなされることもありませんでした。ちゃんと対策がなされているなら、議員も村長も開かれた場で議論がなされることを恐れることはなかったはずです。実際のところはどうだったのでしょうか。「大鹿の100年先を育む会」からリニア対策委員として委員会に出席してきた前島久美さんに聞きました。

Q 新しくできたリニア連絡協議会では、「育む会」は参加していません。なぜでしょうか？



前島 わかりません。対策委員会に参加した各種団体の中で、新しい協議会に参加していないのは「育む会」だけです。「育む会」が当初からリニアの問題に取り組んできたからでしょうか。村に書面で質問状を送りましたが、いまだに返事が来ません。

Q 仲間外れですね。リニアについて村の方針と違うことを公の場で言うのはまずいのでしょうか？

前島 対策委員会では「逐一〈育む会〉の名前を出すのが気に食わない」と他の委員に言われたことがあります。もともと私たちは委員会への参加を希望したわけではなく、若い世代の声を拾い上げ、植生調査などの知見を活かしてほしいと村に請われて参加しました。ところが先ほどの発言は委員会では不問でした。大鹿村の教育委員会に団体利用の登録をしようとしたら「政治的だから」とできなかったこともあります。公の場でリニアについて冷静な議論をすること自体を、村は行政の中立性に反し拒んできたのではないのでしょうか。

Q 柳島村長は、対策委員会で独自の調査ができたのが成果だと言っています。

前島 私は土砂災害についての学習会や、阿智村で実際に行われたような社会環境アセス（住民や事業者、来村者へのアンケートも含めた住民生活や社会環境への影響を評価する独自調査）を大鹿村でもできないか提案もしました。ところが「いまさらやっても遅い」「よそはどんどん進んでいるんだから」という他の委員の声の中、提案は通りませんでした。別の委員が提案した小渋線の運行の独自シミュレーションの提案も実現していません。こんな状況で着工して、もし事故や災害が起きたら村は責任を取るのでしょうか。

Q 対策委員会でも工事ありきの議論だった？

前島 対策委員会はガス抜き、アリバイ作りのためのものだったと言われても仕方ないと思います。異論を言ってもＪＲ東海に「それは前島さんだけでしょう」と言われたこともあります。地方自治への不当な介入ですが村はたしなめもしませんでした。力不足でした。

これからの住民生活のことを思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

Q 当初、アクセス道路の整備が終わってから本体工事に着工すべきだと、村は主張していました……

前島 村長もＪＲの説明を聞いて驚いていました。いづどこでなぜ村がその要求を下ろしたのかも、一切住民には説明されません。ＪＲが無理と言えど諦める、村の姿勢は一貫していました。小渋線の改修は村が要求しなくてもＪＲが進めたことです。私は道路のこととリニアのことは別物という意見ですが、村は住民の要求の強かった複線化も諦めています。

Q 住民の意見は反映されたと思いますか？

前島 いいえ。私は2015年に136筆の署名とともに住民との開かれた意見交換の場を求める要望書を、昨年、住民主催のＪＲによる説明会を村を通じて求めました。村はこれらの要求に答えていません。ＪＲとの協議を自分でやれと言われたときには啞然としました。その結果、昨年の反対陳情時には、2000筆を超える署名が全国から集まりました。全国に私たちの不安を受け止めてくれる人たちがいます。そんな中、大鹿だけで反対できないと、住民よりもＪＲを優先してきた村の責任は大きいと思います。

Q 村は確認書を結んだのだから、蒸し返すべきではないという意見があります。

前島 確認書は村とＪＲとの約束であって、住民が守る義務があるものではありません。村長には、工事現場の保安林の解除や河川工作物の許可等で同意権限

があり、工事を止めることも、取引材料にすることもできます。村が村内の異論を封じて結んだ確認書を根拠に、これまで同様ＪＲの都合を優先すれば、今後大鹿村は、私たちの命を守る村としては成り立たなくなるでしょう。



年末に土砂崩れを起こしたヘルシーミート手前の道。リニアは災害を回避できない